いらなかった才能

へたくそ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

倉橋　陽菜乃と神島　優斗の中学生活??

目次

1時間目　神島　優斗 ―― 1
2時間目　2人の時間 ―― 6

1時間目　神島　優斗

世の中、いろんな才能がある。
料理の才能、運動の才能、勉強の才能、ゲームの才能そして

『殺しの才能』

３年Ｅ組、通称ＥＮＤのＥ組。私立椚ヶ丘中学校で最底辺の扱いを受けている人間が入れられるクラス。
今のＥ組ではおかしな環境ができあがっている。それは先生（ターゲット）と生徒（アサシン）。
この二つがこの教室では異様な形で成り立っているのだ。

殺先「皆さんおはようございます。それではこれからＨＲを始めます。日直の人は号令を。」

渚「起立!!」

渚が号令をかけると同時に全員が立つ。ただし、ただの起立ではない。起立と同時にクラス全員が銃を構え銃口を殺せんせーに向ける

渚「気をつけ！」

完璧に標準を合わせる。そして

渚「礼!!!」

全員一斉発砲、２５人が殺せんせーに対先生用ＢＢ弾を放つ。

しかし殺せんせーは清々しい顔で躱す。速度はマッハ２０、そのせいで殺せんせーが

3人に見える。

殺先「皆さん元気で何よりです。発砲したままで結構なので欠席を取ります。磯貝くん」

磯貝「は、はい！」

殺先「すいません、銃声の中なのでもう少し大きな声で。」

磯貝「はいっ!!」

殺先「素晴らしい!!遅刻欠席者なし！これは大変すばらしいことですよ皆さん！だがしかし、今日も命中者はゼロですか。殺せるといいですね、卒業までに。ぬるふっふっふっふ。あぁ、そうそう。今日は転校生がいるのでした。」

岡島「先生！転校生とはもしや女子ですか！」

殺先「残念、男子ですよ。」

岡島「そんなぁ～…」

中村「せんせー早く転校生紹介してよ～！」

殺先「それもそうですね、それでは入ってきてください神島(かみしま)くん」

殺せんせーが呼ぶと一人の男子が入ってくる。髪と目は真っ白で、優しい雰囲気が印象的な好青年だ。

身長も１７０㎝ほどで体つきも細くはないが、何となく細いという印象がある。

神島「皆さん初めまして。神島(かみしま)優斗(ゆうと)です。事情は烏間先生から聞いています。これからよろしくお願いします。殺せんせー」

殺先「ぬるふっふっふ。初対面でなんともいい殺意を向けてきますね君は。楽しみにしてますよ」

神島「それで先生、僕の席はどこに「ゆーくん!!」うわ！え、君は誰だい!?」

全員「倉橋（さん）!?!?!」

神島「倉橋??もしかして、ひなちゃん??」

倉橋「そうだよ!!今までどこにいたの!?なんで連絡してくれなかったの!?ずっと探してたんだよ!?」

神島「ご、ごめん。それは後で話すからとりあえず離れてくれないかな??」

どうやら二人で知り合いなようだ。
いきなり抱き着いてきた倉橋に戸惑っている神島は苦笑いで提案するが

倉橋「いや、離れない…」

神島の胸に顔をむずめ、震えた声で答える。それに気づいた神島は苦笑いをやめ、仕方ない感じでしかし優しい笑顔で倉橋の頭を撫でる

神島「相変わらず甘えん坊だね、ひなちゃんは」
倉橋「そんなことないもん…」

全員「「なんなんだこの展開は…」」

転校生が来た瞬間に展開された激アマのラブコメにクラス全員のツッコミが一致した

２時間目　　２人の時間

優斗が転校してきた日、幼馴染である倉橋（くらはし）陽菜乃（ひなの）と再会した。
挨拶が終わり優斗は抱き着いてくる倉橋を相手にしながらみんなの質問に答えていた。

渚「神島くんはなんでＥ組になったの？成績不振？」
倉橋「それはないよ。もしこの学校にいたなら私が気付くよ」

優斗が答える前に陽菜乃がムスッとした顔で答えるが、上目遣いになっているためそれほど怖くない。
それを見た優斗は陽菜乃の頭を撫でながら渚の質問に答えた

神島「その通り僕はここの学生じゃなかったよ。僕は他所（よそ）から来たからね。」
渚「それじゃ転校初日に何かやらかしたの？理事長のトロフィーを壊したりしたとか

？」

カエデ「流石にそれはないよ渚」

そう訪ねる渚にカエデはそれはないと笑いながら反応する。そのやり取りにクラスのみんなが笑う中渚は一人だけ何かを確信したまっすぐな目で優斗を見る。

渚は気付いているのだ。このタイミング、この時期に椚ヶ丘のE組に入ってくる転校生。かなりの確率でただの生徒ではない。何かしらの才能があるのだろうと。

それは当たっていた。だがそれは渚にとって予想外の回答だった

神島「そうだね。烏間先生さんにも許可はもらってるし教えておこうか。」

『僕は暗殺者なんだ』

その途端教室は静まり返った。静かに聞いていた殺せんせーでさえ驚いていたのだ。

岡島「な、なに言ってんだよ神島。それなら俺たちだって同じ…」
神島「いいや違うよ岡島くん。君たちの生徒先生（殺す殺される）よう一方通行のような関係じゃない。殺るか殺られえるか。殺らなきゃ殺られるような世界。本当の暗殺の世界だよ」

その時の優斗はさっきまでの優しい笑顔ではなく、真剣でどこ悲しい顔をしていた。
渚も自分が思っていた以上の出来事に驚きを隠しきれていなかった

神島「だから俺がE組に来たのは落とされたんじゃなくて依頼を受けて来たっていうのが正しいね」
倉橋「ゆーくんが殺し屋になったっていうことはやっぱりあの人が原因なの?」

倉橋が優斗に聞くと少し待った顔で小さく「うん」とだけ答えた

倉橋「そんなのおかしいよ!あんなに嫌がってたのに!私やっぱりあの人と話してくる!」
神島「それはだめだよひなちゃん。これは僕があの人に頼んでしたことだ」

倉橋「そんなわけ、だってゆーくんは…」
前原「なぁ、そのさっきから言ってるあの人って一体誰なんだ？」
神島「僕の父親であり僕の師、神島（かみしま）　豪（ごう）だよ。」
前原「その人が一体何をしたって言うんだ？」
神島「そうだな、隠すようなことじゃないんだけど。これは今話すべきことじゃない。烏間さんによれば停学中の人もいるみたいだし。それに先生を殺す仲間も増えるかもしれない。そうなっていちいち説明するのも大変だからね。E組が本当の意味で全員揃ったら話すよ。」

神島はまるで自分の言ってることが正しいことを疑う余地もなく言った。
自分の言ったことは外れない。そう確信した目で。

放課後

倉橋「ゆーくん一緒に帰ろう？」
神島「いいよ。スーパーに寄ってもいい？食材がなくて」

倉橋「ゆーくんがご飯作ってるの？みんなの分作るの大変じゃない？」
神島「今は一人暮らししてるよ。これも人生経験だってさ。」
倉橋「そうなんだ。それじゃゆーくんの部屋行きたい！久しぶりにゆっくり話そうよ！」

「いいよ」と答えた神島は帰る準備を終わらせて倉橋と下校した
その話を聞いていた中村、前原、岡島は二人の後をこっそりと付けていった
神島は付けられてることに気づいてはいたが、意図を理解してなかった為あえてスルーしながら倉橋と買い物をしていたのだが、その姿はまるで新婚夫婦の買い物のような雰囲気だったため、岡島の殺意に困惑しながら見事に3人を撒いた。
神島の住んでるアパートに着いた二人は…

倉橋「いっぱい買ったねえ！何作るの？」
神島「ひなちゃんは何が食べたい？」
倉橋「パフェ食べたーい！」
神島「それはデザートにね？」

そこでもラブラブな雰囲気を醸し出していた
結局夕飯のメニューは無難にカレーという事で2人仲良くカレーを作った
カレーを食べ終わった後に神島がパフェを作ったと聞いた倉橋はものすごい勢いでパフェを完食した
甘いものが好きとは知っていた神島もこれには驚いたようだ

神島「パフェはどうだった?うまく作れたとは思うけど初めてだったから」
倉橋「すごい美味しかったよ!毎日食べたいくらい!」
神島「毎日なんて食べたら太っちゃうよ?」

神島が言った途端倉橋が俯いた
神島はデリカシーのない事言ってしまったと思い急いで謝ったが倉橋は返事の代わりに…

倉橋「…が…ったら…う?」
神島「え、ごめんひなちゃん。聞こえなかったからもう一回言って?」
倉橋「うっ…。私が太ったら嫌いになっちゃう?」

小さく弱弱しい声で倉橋は神島に聞いた

倉橋は幼いころから神島のことが好きだった。もちろん異性として

いきなりいなくなってしまった事で伝えれなかったことに後悔していた倉橋は、再会した時にすぐに伝えようと思ったがやはり簡単には言えなかった。

しかも神島優しい顔つきをしており、性格も優しいためいつ他の誰かに取られてもおかしくない状況で自分の事を嫌われるという最悪の展開を想像してしまった倉橋は突然の不安に襲われた。

しかし神島はそれに気づいておらず、「久々に会った仲のいい幼馴染に嫌われたくない」程度のことだと考えていた。

神島「大丈夫、ひなちゃんはひなちゃんだよ。嫌いになんてならないから安心して」

誰もが聞いても勘違いしそうな言葉。本人も無自覚に言ってるのだと分かっていても倉橋は嬉しくて思わずニヤけてしまう。それを隠すかのようにまた顔を神島の胸に埋めた

神島「本当に甘えん坊だね」

倉橋「…ゆーくんが甘やかすからゆーくんが悪い」

神島「はいはい」

まるで恋人のような会話。今はまだこのままでもいいかもと思ってしまった倉橋はそのまま意識を落としていった